

リニューアル課題を通して平和博物館のあり方を考える

岡田 英樹

〈はじめに〉

1992年5月に開設された「立命館大学国際平和ミュージアム」は、世界初の大学附設平和博物館として、平和を考える場を広く社会に提供してきた。常設展見学者は40万人を超え（2003年度末）、特別展見学者は22万6千人、小学校・中学校・高校の団体見学は1千9百校にまでのぼっている。平和教育のための社会開放施設として、大きな成果をあげ、社会的にも高い評価を得てきたと言えるだろう。

このミュージアムも10年が経過し、展示内容の刷新をはかるべく3年前から「ミュージアム高度化・リニューアル」の検討が始まり、2005年4月のリニューアル・オープンがめざされている。いま、そのリニューアルの中身を紹介しつつ、「平和博物館のあり方」について問題を提起し、議論に参加していきたい。

1. 過去の歴史と誠実に向き合うこと

世界の平和を考えると、過去の歴史をしっかりと学び、共通の歴史認識を作り上げていくことが不可欠である。博物館が、「モノ資料を通して過去の事象を正確に記録する」ことを使命の一つにしている以上、これは当然のことである。しかし、日本の平和博物館の多くは、戦争の問題を取りあげるに際して、「被害の記録」を軸に展示を展開してきた。たしかに、過去の戦争における悲惨な体験を風化させることなく後世に語り伝え、二度と戦争を起こさないという国民意識を作り上げることは平和教育の重要な柱であろう。しかし過去の歴史は「被害」だけではない。むしろ15年戦争の記録にあたっては、「加害」の歴史にもしっかり眼を向けることが重要であり、そうした展示であってこそ、アジアの人びととの共通理解が生まれ、平和創造へ向かってともに歩んでいくことが可能となるのである。

今次リニューアルにあたっては、「日本軍隊の戦場での加害」、「植民地・占領地での加害」、「未解決の戦争責任」といった項目で、展示内容の拡充をはかって

いきたい。

2. 現代の問題を見つめ考えること

博物館が、情報にも限度があり、評価も定まっていない、同時進行的な現代的課題に挑戦することは大いなる冒険と言わなければならない。しかし、21世紀に入ってもなお、地球上に戦争・紛争が絶えない状況にあって、平和教育の立場に立てば、この問題から眼をそらすことは許されない。今次リニューアルでは、「第二次世界大戦後の戦争と平和」という大項目を立て、「冷戦構造と戦争」という柱のもとに、「朝鮮戦争」と「ベトナム戦争」を、「冷戦後の戦争」として「湾岸戦争からイラク戦争まで」を展示することとした。それとともに、核兵器をふくむ各種兵器の開発が、軍需産業とどのようなかわりを持ち、軍事戦略にどのような変化をもたらしたのか、またアフリカ・東欧・アジア・中南米の四地域に焦点を当てて、その地域の歴史的特質とともに、その地域の特徴的な戦争・紛争を取りあげ、その要因の多様性を示していきたい。その展示にあたっては、できる限り客観的な事実の展示にとどめることに留意したい。

3. 平和の概念を広くとらえること

日本憲法がうたう「平和に生きる権利」の「平和」とは、戦争のない状態だけを言うのではない。憲法は飢餓、貧困、人権抑圧、差別、地球環境の破壊など、生命を脅かし、人間発展の可能性を阻害する要因をすべて取り除くことを求めているのである。こうした広い意味での「平和」という視点から、地球上に生起しているさまざまな事象を、経済的不平等、社会的差別、地球環境の破壊、戦争被害という枠組みで提示して、見学者の注意を喚起していきたい。

4. 平和創造の主体者を育成すること

平和教育は、「知る」ことで終わってはならないと考える。見学する人たちに「私に何ができるか」を考え、「平和をどうつくり出すか」を考えてもらえる博

物館でありたいと思う。そのため、NGOなど各種市民団体の活動を紹介するとともに、主体的行動を起こすに必要な情報を発信していく。また、関心をもったテーマを調査し、研究するための文献閲覧、情報の検索をサポートする体制も整えるとともに、「ミニ企画展示室」を設け、学生や市民団体が平和にかかわる展示をおこなう場を提供する。

5. 感性を通して平和を考えること

百の言葉より、一つの芸術作品が、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、人間の尊厳などを感動的に語りかけることは、わたしたちが常に体験してきたところである。「平和ギャラリー」を新設し、優れた絵画、彫刻、文学作品などを展示し、感性を通して平和の問題を訴える。

また、長野県上田市にある「無言館」の協力を得て、15年戦争で戦死し、再び絵筆をとることができなかった「戦没画学生」の遺作と遺品を展示して、芸術への道を閉ざされた若い学生の思いを語る。

6. 地元からの平和発信を紹介すること

本ミュージアムは、京都に位置しており、観光をかねてミュージアムを訪れる人も多い。京都にある戦争と平和にかかわる史跡とともに、宗教関連施設、教育・文化関連施設、無形文化財などを、平和と人権の視点から見直し、京都の新しい見方を紹介するとともに、京都在住の著名人からの平和へのメッセージを展示し、京都からの平和発信をおこなう。

〈むすび〉

以上紹介してきたように、今次リニューアルがめざす「博物館像」は、かなり大胆なものであり、盛りだくさんであり、それだけに冒険的であるともいえるだろう。こうした構想を可能としたのは、政府や自治体から独立した「私学」付設のミュージアムであったこと、多くの専門家の英知を結集しうる「大学」付設のミュージアムであったことによるものであると考える。この「ミュージアム」でこそ可能であった「リニューアル」を成功させ、新しい「博物館像」をつくり出したいと、願っている。

(報告者 立命館大学国際平和ミュージアム副館長)